

肉刺

〔和漢三才圖會人倫之用〕疥目 和名以乎女 俗云魚乃目
疥目 手足邊忽生如豆、龜強於肉也、

凡疥目高起形似疥而硬、頭細碎、蓋是肉刺之種類、故獨生不生子也、頻灸之愈、

〔倭名類聚抄三〕肉刺 病源論云、肉刺、和名乃脚脂間生肉如刺、由著靴小相措而所生也、

〔箋注倭名類聚抄二〕谷川氏曰、乃以乃伎之轉、謂芒刺、須美、墨也、刺字意也、原書小上有急字、相

上有指字、無所字、

〔有林福田方十〕肉刺

此ハ脚ノ指ノ間ニ肉ヲ生ヲ云也、薰陸香、硫黃、右等分ニ末シテ、上ニ付テ、烙ケ、又甘刀ヨキカタヲ以テ割、刺ヲ去テ、即書墨ス、リノス、ヲ以テ研コト數過セヨ、

〔病家須知五〕微毒の心得を説

微毒

微毒、我邦の昔は、唐瘡といふ、異域より傳來するが故なり、中華にては廣東瘡カンヨウサウと稱、その廣東と云は、南海の港津にて、此際の長崎の如き地なり、この廣東より毒を支那の國內に傳播たれば、其病の起る地名を以て病名とせるなり、その病を傳たる時代、和漢ともにあまり遠からず、僅三百年前後に過まじ、意に、此病の初は、全く蕃船より傳染たるにて、異國より航海たる船の、博多府内あたりに著たる頃にもあるべし、然を其毒の由來を遺失て、あらぬ病因を濫稱、治法も各殊にして、一定せぬは、いと鹵莽なることなり、

〔一本堂行餘醫言六〕微毒略中

此邦本日今時醫流及俗間、呼此證爲濕毒者、蓋本於王肯堂見上且通呼是疾爲或濕或濕氣濕瘡者、皆非也、此證豈濕寒之所可生乎、意其說全自主張濕熱之說而來耶、夫如此則住在高山深谷河濱海涯霧露水濕之處者、槩皆可患此證、而反無病者、而居於通都大邑平康乾燥之地者、多罹此苦、則可見是